平成３０（２０１８）年度前期
授業評価アンケート（中間・期末）の結果と分析及び提言
―PDCA サイクルに向けて―

教養教育院総務委員会委員長
南川慶二

目的

大学教育に関しては，教育目的・目標の明確化やその到達度，さらに教育（授業）方法の改善や成績評価の適正化が強く求められている。そのために，学生と教員の双方に対してアンケートを実施し，徳島大学の教養教育について質的・量的に充実した授業の提供をめざすことを目的としている。第３期中期計画・中期目標を達成するためにも学生と教員の双方に対してアンケートを実施し，双方向の PDCA サイクルを確立し，徳島大学の教育目標を達成することを目的とする。

実施方法と時期

全学共通教育センターが実施していたアンケートを継承して平成２８年度から始めた方法に従い，中間アンケート，期末アンケートを実施した。全科目群を３グループに分け（A:一般教育科目群，グローバル化教育科目群，イノベーション科目群，B:基礎基盤教育科目群，汎用的技能教育科目群，C:地域科学教育科目群，医療基盤教育科目群，外国語教育科目群），1.5 年サイクルですべての授業科目について実施している。平成３０年度前期は，平成２８年度後期と同じ B グループの科目群（受講者が５名以上）を対象に，中間アンケート（平成３０年５月２１日～６月８日），期末アンケート(平成３０年７月６日～８月２日)を実施した。教員に対しては，授業実施報告書の提出（平成３０年９月まで）として実施した。

結果と分析

１）回収率

平成３０年度前期の中間アンケート回収率は 87%、期末アンケート回収率は 74%であった。中間アンケートの方が期末アンケートより回答率が高いのは，これまでと同じ傾向であり，学生が自分の回答によるフィードバックがあることを期待しているためと推測される。

アンケート方法についての教員の意見として，後半だけでもフィードバックを返せるので良い方法であるという意見があり，実際に中間アンケートの結果を考慮して後半の授業を改善した教員も多いようである。その一方で，全般的に期末アンケートで改善が認められたとするコメントは少なかったことから，教員の改善やそのための努力が必ずしも学生に伝わっていないかもしれない。教員からのその他の意見として，授業時間を使うと予定していた内容を一部実施できないことや，成績評価に影響するという疑念を生じる可能性の指摘，複数の教員で担当している授業では交代によってフィードバックができず無意味などの否定的な意見も散見された。これらの意見を考慮し，効果的に学生にフィードバックできる方法を検討する必要がある。

２）教員の授業に対する取り組みについて

基礎基盤教育及び汎用的技能教育科目群では，基礎知識や技術のレベルが異なるクラスがあり，難易度や進度についてのコメントが多数見られた。数学や物理学では計算式を板書で解説するスタイルの授業が多いが，同一の授業に対して板書が早すぎる・遅すぎるという正反対の意見が混在する場合が多々見られた。情報科学においても，パソコンでの課題作成をゆっくり進めてよく分かったという意見と早すぎてついていけなかったという意見が分かれる授業がいくつかの授業で顕著であった。また，一つの学科を異なるクラスに分けて実施している科目によっては，クラス間での内容や進度の違いについての不満も見られた。

評価の高い授業では，講義に簡単な実験を取り入れたり，視覚教材を用いるなどの工夫が理解を助けると評価されている。また，小テストや練習問題を授業中に実施することを要望する学生が多く，これらを実施している授業ではわかりやすいという評価が多い。これらを活用して学生の理解度を確認しながら授業のレベルや進度を調節した上で，理解度に大きな差があるクラスでどのように対応するかを検討する必要も示唆された。

３）学生の授業に対する意識

学生自身の受講態度は評価が高く，自学自習時間が極端に低いことは，他の科目群におけるアンケート結果と同様であった。自学自習の項目が比較的高い科目では，改善してほしい点として，課題(宿題)が多すぎるというコメントが多い場合や，プリントや板書ノートの量が多くてテストのための勉強が大変というコメントがみられるなど，学修時間を充実させることにより学生は負担を感じている傾向がある。

総括

各科目群によってアンケートには一定の傾向が存在する。今回対象となった分野では専門分野につなげるための基礎的な科目が大半であり，到達目標が高く設定されている場合が多いことがクラス内あるいはクラス間における理解度の不均衡の一員であると考えられる。授業中に練習問題を解きたいという意見や，小テストや宿題を課してほしいという意見から，意欲的な学生も多いことがわかる一方で，それらを充実させた科目の中では一部の学生が負担を感じている様子も伺えることから，理解度の分布を把握したうえで学生が自ら学ぶ意欲を持たせる工夫が必要であると考えられる。